

2012

BAKUON
FILM
FESTIVAL



爆音 通信



●『ハピロン2-THE OZAWA-』完成！
相澤虎之助インタビュー

●監督へのメールインタビュー
真利子哲也／筒井武文

●三本のロシア映画に寄せて
来たれ、見よ！ めくるめくロシア映画の世界

●TRASH-UP!! セレクション運動企画
屑山屑男インタビュー

監督へのメールインタビュー

- ①通常上映と爆音上映の違いについてどう思われますか。
- ②爆音上映についての印象をお答えください。
- ③爆音上映が楽しめるシーンを教えてください。
- (真利子監督へ)④数あるアイドルのなかでもクロを起用した理由を教えてください。

真利子哲也 (『NINIFUNI』監督)

- ①NINIFUNIは、通常上映も FULL VOLUME ver. と銘打って公開しました。ついに念願だった爆音上映ができて、もう何も思い残すことはありません。
- ②まず身体に音が響いてきて見えないものが見えてくる。全身の感覚が映画に集中されるので、覚醒するような印象。
- ③大事にしたのは音なので、たくさんあります。車の走行音、風の音、波の音、ももいろクローバー。
- ④自分が思い描いた以上のアイドルグループが実在したことが奇跡でした。人気があるとなかろうと、彼女たちしかいなかったです。



『NINIFUNI』7月9日(月)21:00~
©ジャンコフィルム/真利子哲也

筒井武文 (『孤独な惑星』監督)

- ①②まず僕自身が爆音上映を体験していないので、答えられないことがあると思います。通常、映画の整音作業で調整した音を更に爆音で響かせようとするのですから、音のバランスを取るが大変だろうと思います。特に、台詞、効果音、音楽のすべてがミックスされている場面ではどうなるのか。単純に考えると、台詞が大きくなりすぎるのではないかと、それをどう解決なさるのか、楽しみです。それと、映画監督としては、どこで音を消すかに勝負をかけます。爆音のなかで無音がどう響くのか。それと聞こえるか、聞こえないかのぎりぎり、入っている音がありますが、それが聞こえてきたときに、映画のもうひとつ奥が見えるのじゃないか、爆音上映に期待するところです。
- ③特に、『孤独な惑星』は爆音上映で大きく変わる作品じゃないかと思っています。事実、一般公開の初日、なぜか通常より大音量で上映されたとき、作った本人でも驚くくらい多彩な音に包まれ唖然としました。世界が音でできていることを改めて実感したというか。それに、サウンドデザインの方で、映像に挑戦するように、音でもうひとつの物語を展開した作品でもあります。部屋の中を中心に、音の霊ともいうものが立ち騒いでいます。そうした霊が解放されるのではないかと…。ちょっと怖いような、決して、ホラー映画じゃないんですが。特に楽しみなのは、密かに物干し竿のシーンと呼んでいるところです。台詞がなく、人物の呼吸と環境の音で事態が推移していきます。



『孤独な惑星』7月3日(火)16:50~
©映画美術校/筒井武文

来たれ、見よ！ めくるめくロシア映画の世界

爆音映画祭で、ロシアの3作品が上映されることになった。どれも時を経て色褪せない名作であり、それを大スクリーンで鑑賞できるのは得がたい体験になるだろう。セルゲイ・エイゼンシュテインの『戦艦ポチョムキン』は、黒海艦隊の旗艦ポチョムキン号で起きた水兵の蜂起事件を描いた傑作で、モンタージュを駆使した斬新な手法で世界の映画に大きな影響を与えた。1905年に起きた第一次ロシア革命の20周年を記念して制作されたが、虐げられた人々が人権と自由のために立ち上がるというストーリーは、時代を超えて私たちの胸に迫ってくる。本作の制作時、エイゼンシュテインは、若干27歳。眩いばかりの若いパワーに満ちた作品である。エレム・クリモフの『炎628』は、第二次世界大戦(ロシアでは大祖国戦争と呼ぶ)40周年を記念して制作された作品で、第二次世界大戦を主題とする映画の中でも、もっともリアルで完成度の高い作品として評価されている。1943年のドイツ占領下のベラルーシの戦況を一人の少年の目を通して描いたこの映画は、極限状態で人はどう生きるかという問題に切り込んだ点で、現代社会においてもアクトアルな作品である。ロシア語の原題『来たれ、見よ』は『ヨハネの黙示録』からの引用であり、本作がまさに世界の終末、人類の裁きと救済についての映画であることを物語っている。

一方、ソ連のアフガニスタン侵攻を扱ったアレクサンドル・ソクーロフの『精神の声』は、戦争当時、タジキスタンの国境軍の部隊に同行したソクーロフの日記的な作品である。5部から成る5時間以上に渡る作品だが、モーツァルト、ベートーベン、メンデルソーンの音楽を聴きながら、草木のざわめきを思わせる静かなナレーションに耳を傾け、陰翳に満ちたソクーロフの絵画的な映像を見ながら過ごす5時間は、人生の中でも特別な5時間となるだろう。ソクーロフが『エルミタージュ幻想』で描き出した悠久の時の流れ、『マザー・サン』の絵画的な『アレクサンドラ——チェチェンへの旅』にこめられた平和への願い、『精神の声』は、これらのソクーロフ芸術の本質のすべてを内包した、限りなく豊かな作品である。

ロシア映画界は、これらの文化的な遺産や伝統を受け継ぎながら、現在も次々に刺激的な作品を生み出し続けている。ぜひ映画祭を機に、めくるめくロシア映画の世界に足を踏み入れてみよう。人間の本质を探るロシア映画と過ごす数時間は、あるいは何ヶ月分の実生活にも匹敵するような、鮮烈で充実した体験となるに違いない。

鴻野わか菜 (千葉大学文学部准教授)

1973年生まれ。専門はロシア文学・文化。東京外国語大学、東京大学大学院、ロシア人文大学大学院修了。共著書に『幻のロシア絵本1920-30年代』(淡文社)等、共訳書に『イリヤ&エミリア・カバコフ『プロジェクト宮殿』(国書刊行会)など。



『戦艦ポチョムキン』
7月5日(木)21:30~
Hair Stylistics 無声映画ライブ



『炎628』
7月5日(木)15:50~



『精神の声』
7月4日(水)11:50~

『バビロン 2—THE OZAWA—』監督相澤虎之助インタビュー

爆音映画祭 2012 にて世界プレミア上映される『バビロン 2—THE OZAWA—』。このインタビューは 6 月 2 日、大入り満席となった新文芸座の空族オールナイトの控え室にて、富田克也監督、俳優の川瀬陽太さんらが同席するなかで行われました。



—「バビロン 2」についてインタビューははじめさせていただきます！ まだ僕が作品を見ていないので（一同笑）、申し訳ないんですが…。

相澤（以下、相）「そうですね。出来てないんですよ、まだ。」

—出来てないんですか！

相「いま目下製作中です！」

—「バビロン 2」の制作された経緯を教えてください。

相「これは、からこれ 20 年近く前から、僕が東南アジアをバックパッカーして回っていた頃から考えていたことで、一番最初に『花物語 バビロン』という作品を作りました。タイとか、カンボジア、ベトナム、ラオス、その辺の東南アジアに僕が妙に執着してまして、そこを舞台にして一人の男が旅をしていくというロードムービーの形式を取りつつ、そこに東南アジアのあまり知られていない裏の歴史が重なってっていう映画になっています。アジア裏経済三部作って謳ってるのは、いわゆる麻薬、武器・戦争、あと売春。大体この 3 つのものが表の経済と一緒に裏の経済としてあって、それで世界が回ってるってことです。」

—で、『バビロン 2』はその 2 作目。

相「2 作目です。」

—撮影されたのはいつですか？

相「5 年前ぐらい、2007 年の『国道 20 号線』が終わったぐらいに今回主演してくれた富田克也監督と一緒にカンボジア、ベトナムに行ったときの映像を元に作りました。『バビロン 2』のテーマは武器と戦争、主にベトナム戦争の歴史をトレースする作品になっています。」

—爆音で上映された時に自分で聴くのが楽しみなポイントとか、こういうところを爆音でみんなに聴いてもらおうと面白いぞ、みたいなところは？

相「そうですね。やっぱり今回のテーマが戦争と武器なんで、その部分を是非聴いてもらいたいですね！」（一同、笑）

—「国道 20 号線」「サウダーヂ」もやってくれた山崎巖さんという強力な音のプロフェッショナルが入りましたんで、僕も聴くのが楽しみです！

富田（以下、富）「オールアフレコだから楽しみだよ。同録が一切ないっていう。全部山崎さんの手による音になるっていう、そこが聴き所じゃないですか！」

相「いいこと言った！」

—（笑）今回一応ドラマなんですか？

相「バビロンシリーズっていうのは変な映画で、ロードムービー仕立てのドラマにはなってるんだけど一口に起承転結があるストーリーが展開する話じゃないんですね。一作目を見てくれた人ならわかるんですけど、色々字幕が入るんですよ。歴史的事実が。何ていいたらいいんでしょうね、これは…。」

富「ドラキュメンタリー！」

相「ま、観ながら論文を勉強するみたいな。」

—（笑）

相「日本の高度経済成長とかは、朝鮮戦争とかと一緒にベトナム戦争の特需ってものがでかいと思ってます。」

—「バビロン 2」は『国道 20 号線』『サウダーヂ』ともつながるものがあると思いますか？

相「そうですね。副題の『THE OZAWA』っていうのは『国道 20 号線』に出てくる小澤っていう人物がタイに想いを馳せてる、そういう人間と多少リンクするところがある。ちょうどこれを作り始めたのが『国道』を撮り終わったあとだったので、あの小澤がタイとかカンボジアに行ったらどうなるだろうっていう最初の構想がありました。」

—富田さんは一応主演なんですか？

富「一応じゃねえよ（笑）主演だ！」

—（笑）富田さんの役割は？

相「富田監督はオザワという男で…。」

富「オザワが二人出てくる。『国道』の小澤も出てくる。」

相「富田克也扮するオザワは新宿とか新大久保あたりでキャッチ（女性に声をかけて水商売に誘い込む仕事）をやったんだけどちょっとヘマを起こしまして、『国道』の小澤に「お前は海外行って身を隠してこい」と言われるところから物語が始まります。」

—で、『国道』の小澤がタイに行くとき富田オザワがいるという。予告編での富田さんのショッキングな映像の数々の全貌がついに明かされるということですね。（笑）期待して観に行きます。

相「俺が日本を含むアジアの問題を考えると、やっぱりベトナム戦争ってでかいものがあるって、自分の生まれたのがベトナム戦争の集結した頃だったし、ベ平連とか 60 年代、70 年代から色々引きずる問題があると。植民地支配から脱却するための独立戦争の動きがアジア全体にあったわけだけど、それがベトナム戦争終前後して大体終焉するんだけど。だから俺のなかで結構でかい意味があるんですよ、連合赤軍くらいに。」

—「バビロン」シリーズはライフワークの一環なんですか。2 作目は見逃せないですね！

相「『ランボー 2』みたいなもんです（笑）『ロッキー 2』とかね『2』って結構いいのが多いんだよ、本当に。『アメリカン・グラフィティ 2』知ってる？『2』は 60 年代の映画だからね。『1』は 50 年代代けど、是非それも合わせて観てもらえば面白いと思います。」

—わかりました。（笑）ありがとうございました。



『バビロン 2 -THE OZAWA-』
7 月 4 日（水）20:50～ 爆音プレミア上映
*シアター 2（通常上映）では、空族ナイトも開催

TRASH-UP!! セレクション 『怪猫 呪いの沼』 について



『怪猫 呪いの沼』 ©東映
7 月 5 日（木）18:45～
7 月 11 日（水）21:00～

TRASH-UP!! 編集長 肩山肩男

『怪猫 呪いの沼』、凄いや、これ。

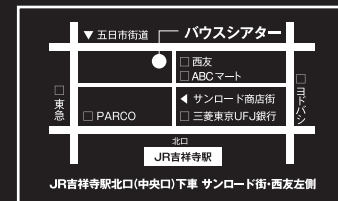
今回なんで選んだかって言うと、もちろん富田勲がやってる音楽もスゴイカッコいいんだけど、日本のホラー映画を探っていたとき、これが最初のスプラッター映画なんじゃないかってぐらيسプラッター描写がスゴイ。白黒なんですけど、手は飛ぶは、首は飛ぶはもう大変なことに。

もう一個の見所は、主役の里見浩太郎さんなんですけど、当時里見さんは東映の若手スターで、『十三人の刺客』とかあの辺に出てて、とりあえずこの時代の里見浩太郎って、マゾヒスティックにみんなから酷い仕打ちを受けて、それを耐えてるのを見るって言う醍醐味があって（笑）。これもモロにそれで、可哀想なぐらい里見浩太郎に色んな仕打ちが来て、悔しい顔してじっと耐えてるのを大画面で見ると超見所！もうビックリするよ、里見浩太郎の無念の顔。

あと、昔のホラー映画って怪談ものが定番だったと思うんですけど、その中のジャンルとしてこういう化け猫映画っていうのが 1 つの確立されたものとしてあって、昔はいっぱい作られてたんだけど、今の日本のホラー映画って、それが単純に忘れられちゃってる部分があるんで、いちばん今のホラー映画に近い部分のある化け猫映画ってことでこれを選びました。

今回上映される作品で他に楽しみなのはやっぱりダントツで『炎 628』。スクリーンで観たい。昔ビデオで観た時は普通の戦争映画と思ってみたらドギモ抜かれたよ。見たことない映像だった。見てない人には、とにかく凄いやとか言い方が無い。ハンパないよ。（談）

BAKUON FILM FESTIVAL 2012 6.29 (FRI) >>> 7.14 (SAT) Kichijoji Baus Theater



第5回爆音映画祭
6月29日（金）～7月14日（土）
吉祥寺バウスシアター
問合せTEL 0422-22-3555

www.bakuon-bb.net

編集・構成（爆音映画祭 2012 スタッフ）：甘利類、加勢恵理子、加藤文、金長隆子、黒田千穂